

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (1/6)

学部・学科	臨床心理学部・臨床心理学科	職名	准教授	氏名	ナカ 中	クボ 窪	ヤスシ 靖	
学歴	昭和59年 3月 龍谷大学文学部文学科英文学専攻卒業 昭和62年 3月 龍谷大学大学院文学研究科 (修士課程) 英文学専攻修了 平成 4年 3月 龍谷大学大学院文学研究科 (博士後期課程) 英文学専攻単位取得満期退学							
学位	昭和62年 3月 文学修士 (龍谷大学)							
専門分野	英米文学							
専門資格								
所属学会	平成 2年10月 日本アメリカ文学会 平成 5年 5月 日本英文学会 平成18年10月 日本アイリス・マードック学会							
受賞								
担当 授業科目	学 部 英語コミュニケーション ・ 、英語リーディングI ・ ・ ・ ・							
論文指導	該当なし							
F D 活 動 ・ 教 育 実 績	科目名	英語コミュニケーション	科目カテゴリー	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験	実施学期	春 ・ 秋	履修者数	55名(2クラス)
	授業の概要 :							
	英語の「聞く・話す」側面に焦点を当て、学生同士のペアワークを多用して、発信型の英語の授業を展開する。特に秋学期開講の本授業においては、12月に実施する英語の「口頭発表の試験」に焦点を当てて実施する。							
	教育活動の振り返り : 授業の中心的な位置を占めるペアワークにおいては、基本英語での発信を要求していたせいか、各授業内で集中的に活動を続けることに困難を示す学生が散見されたが、12月の「口頭発表の試験」を契機に授業の中での目標が定まったように見受けられた。 教育活動の成果 : 「口頭発表の試験」については、合格・不合格にかかわらず授業の受け方に積極性が増した。また、不合格者は8名で、90%の受講生が合格を勝ち得たことは、学生にとっては地道な授業内での活動が実を結ぶことが自覚されたと考えられる。 今後の課題 : 課題に熱心に取り組んだ学生にとっては、基本的なやり取りまでは達成できた。次の段階としては、より柔軟な受け答えができるように繰り返し練習が必要であろう。							
F D 活 動 ・ 教 育 実 績	科目名	英語リーディング (2年次以上クラス)	科目カテゴリー	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験	実施学期	春 ・ 秋	履修者数	29名
	授業の概要 :							
	1年次生向けの必修英語科目で、5分の4の出席を満たすことができずに「不可」を得ての受講とする。							
	教育活動の振り返り : 卒業要件となっている科目の再履修であり、受講生の多くはモチベーションを高めにくい状況がある。それゆえ、授業の始めに前回授業の復習テストを実施することで、出席のリズムを作り出すことができたというコメントを得た。 教育活動の成果 : ただ闇雲に毎回の予習を要求するだけでは、受講生の学習意欲を高めることはできない。授業の中心に「復習テスト」をすえることで、遅刻のみならず欠席の抑止力を持たせることができた。							

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (2/6)

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">FD 活動・教育実績 つぎ</p>	<p>今後の課題： 再履修クラスの場合、全く出席のない学生が必ず10%は存在する。そして、授業の終了時には、それを含め全体の30～40%の受講生が出席しなくなる。今年度は約60%の学生を合格へと導くことができた。次のステップとしては、途中で足の遠のく受講生を出席させる有効な手立ての策定である。</p> <p>・学内外のFD関連講演会/セミナー等への参加実績 学内 第2回FD研修会、「授業と評価をつなぐ為に ルーブリック評価入門 (3月5日実施)」講師：井上史子氏(帝京大学・高等教育開発センター・教授) に参加した。</p> <p>・教育効果が高い、あるいは教育の一環として行われている課外活動等</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 平成25年度(2013年度)より、人間学研究所共同研究プロジェクトの活動の一環として、学生には英語学習ソフトを利用した課外での英語学習を課している。 2. 欠席した学生には研究室に来させて、欠席回の授業の概略を伝えることとしている。 3. 月曜日4時限にオフィスアワーを設定し、学生の相談を受け付けている。 4. 2年次には、12月に学外面接補助員を招き、「英語コミュニケーション」の締めくくりとして口頭による英語の試験を課している。自ら文章を構成しそれを発表することで、読むという側面だけでなく、話す(聞く)という対人的な場での実践的な能力の涵養を目指す。
<p>H26 年度 研究課題</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 20世紀イギリス小説の研究 二つの作品の比較研究を中心として 2. 「多様化する学生と大学英語教育」(人間学研究所共同研究プロジェクト)のための研究調査 2年目
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">平成二十六(2014)年度の研究活動の概要</p>	<p>5月24日(土)・25日(日)実施の「日本英文学会第86回」(於：北海道大学)に参加した。24日実施のシンポジウム第四部門「ミドルブラウという名の挑発」では、教養主義とミドルブラウとがつながるということ、またそれはいわゆる中流以上のスノッピ的な意識を映し出すものではなく、下層階級に属するものの意識を反映したもので、現代のカルチュラルスタディーズの研究対象でもある、との論が展開された。25日(日)のプログラムでは、アメリカ19世紀最大の作家の一人ナサニエル・ホーソンについてのシンポジウムと、作品の中の作品を描くいわゆる入れ子構造の作品についての研究発表に出席した。いずれも、伝記を中心に研究を進めるに際しての有益な視座を得ることができた。</p> <p>7月5日(土)、日本アメリカ文学会関西支部例会「7月シンポジウム 恐怖の君臨 盗品/商品/複製としてのエドガー・アランポー」(於：近畿大学東大阪キャンパス)に参加した。一人のシンポジウムは「複製」をキーワードにして、ポーは恐怖を使用品化したとする。別なシンポジウムは、これまでの解釈とは異なり、奴隷解放家としてのポーを明らかにする。また、別なシンポジウムは、ポーの中に失敗の美学を見出す。また、銀板写真とポーの作品を結びつけるシンポジウムもいる。さらには、ナボコフの中にはポーの影響が色濃く存在していると指摘するシンポジウムもいる。</p> <p>7月30日(水)、人間学研究所主催共同研究プロジェクト「多様化する学生と大学英語教育」の研究調査の一環として、「英語学習ソフトを用いたリスニング力の強化」というタイトルのセミナーを実施した。当日は、リアル・イングリッシュ・ブロードバンド株式会社より栗林克樹氏をゲストスピーカーとして招聘した。</p> <p>9月15日(月)、龍谷大学英語英米文学会研究発表会(於：龍谷大学大宮学舎)に参加した。講演が2つと、研究発表が1つ行われた。17世紀のイギリス詩人サミュエル・ガースの講演では、18世紀古典派の代表的な詩人への影響を明らかにした。アメリカ南部作家を主題にした講演では、ノーベル賞作家であるフォークナーとハーストンとの間にエコフェミニズムを見出した。固有名詞の英語表記に注目する発表においては、観光地京都の神社仏閣や通りの名称のつけ方の規則性に注目するものであった。</p> <p>10月25日(土)、第16回日本アイリス・マードック学会(於：京都文教大学)に参加し研究発表を行った。研究発表が4つと特別講演が1つ行われた。その中の一番目に研究発表を行った。</p>

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (3/6)

<p>平成二十六(2014)年度の 研究活動の概要 つき</p>	<p>後述:(学会報告、学会活動) また、最後の講演では、仏文学を研究する京都橘大学名誉教授の志賀亮一先生をお迎えして、西洋文学の中に描かれる妖婦について興味深い講演を拝聴した。</p> <p>11月15日(土)、日本アメリカ文学会関西支部11月例会の「『食』から読むアメリカ文学」(於: 京都府立大学)というタイトルのシンポジウムに参加した。劇作家ユージン・オニールと19世紀の大作家ハーマン・メルビルの作品を“食”という切り口で解釈する2人のシンポジストに続き、比較的マイナーな作家および映画作品の中について、それぞれの作品と“食”とのかかわりを論じる発表が続いた。“食”とは人間にとって身近な存在であるが、そこから文学を眺めるとまた違った側面が浮き彫りになり、大変有益であった。</p>
<p>平成二十六(2014)年度の 主な研究成果等</p>	<p>(著書)</p> <p>(論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「ポストオフィスタワーを巡る2つの英国小説 アイリス・マードックの<i>The Black Prince</i>(1973)とイアン・マキューアンの<i>Saturday</i>(2005)を比較する」、単著、平成27年3月、京都文教大学 臨床心理学部研究報告第7集 (pp.17-30) 2. 「Extracurricular English Study through ALC NetAcademy 2 & the Results」、単著、平成27年3月、京都文教大学人間学研究所 人間学研究Vol.15 <p>(学会報告、学会活動)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「マードックの<i>The Black Prince</i>とマキューアンの<i>Saturday</i>を比較する BTタワーが象徴するもの」、単独、平成26年10月、第16回日本アイリス・マードック学会、京都文教大学 <p>(その他、エッセイ・翻訳・学術講演等)</p> <p>報告:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 共同研究プロジェクト「多様化する学生と大学英語教育」、共著、平成27年3月、京都文教大学人間学研究所 人間学研究Vol.15 <p>(調査活動)</p> <p>(学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含)</p> <p>(学内活動)</p> <p>図書館委員会委員</p>
<p>平成二十六(2014)年度の 社会における活動</p>	
<p>平成二十一～二十五(2009～2013)年度の 主な研究成果等</p>	<p>(著書)</p> <p>(論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「ジョージ・オーウェルの作品と彼を描く伝記と <i>Down and Out in Paris and London</i>を中心として」単著、平成23年3月、京都文教大学人間学研究所 人間学研究 Vol.11 (pp.1-15) 2. 「アイリス・マードックの描くユダヤ人主人公 <i>The Message to the Planet</i>(1989) と <i>A Fairly Honourable Defeat</i>(1970)を比較して」(研究ノート) 単著、平成25年3月、京都文教大学 臨床心理学部研究報告第5集 (pp.85-94) <p>(学会報告、学会活動)</p> <p>学会への参加報告:</p> <p>平成21年度:</p> <p>アイリス・マードック学会第10回大会(於: 川崎医療福祉大学)10月18日(土)実施において、「<i>An Accidental Man</i>に登場する 偶然の運命に翻弄される ものたち」というタイトルの研究発表をおこなった。その中で、マードックの作品<i>An Accidental Man</i>の中心テーマである 偶発性に注目し、“偶然に支配される”人物オースティン・ギブソン・グレイを中心に主要な人物を含めて、作者マードックの意図が登場人物に偶発的な運命を与えることであったことを明らかにした。</p>

(学会報告、学会活動 つづき)

平成22年度：

1. 日本英文学会第82回大会（於：神戸大学国際文化学部）に参加した。第一日目5月29日(土)に、シンポジア「Victoria朝の自伝を読む」を聴講した。シンポジストはそれぞれに、宗教者の自伝を代表してJohn Henry Newmanの*Apologia pro Sua*を、女性の自伝を代表してHarriet MartineauとMargaret Oliphantそれぞれの自伝を、当時の流行作家を代表してAnthony Trollopeの*An Autography*を、そして、美術評論家として著名なJohn Ruskinの*Praeterita*を取り上げた。特に、NewmanとRuskinの発表を興味深く拝聴した。両者とも、一般的に考えられるような自伝のスタイルをとっていないことが指摘される。前者は、幼い頃の記述や家族の描写はない。神父であるという立場からキリスト教が話題になるのであるが、社会に受け入れられないという体験ゆえに、その論調は読むものを説得しようとするものである。シンポジストは、筆者が客観性を持たせるために他人の言葉を引用し、また平易な言葉で淡々と文章を組み立てることを指摘し、それが著名な作家たちが彼に注目することの1つの原因であると述べた。

一方、後者について発表をおこなったシンポジストは、あってしかるべき記述がないと言う。また、晩年の体調が悪化しつつある時期の作品であるせいで、脈絡に混乱が見られると言う。その一方で、ラスキンの脳裏によぎった彼のこれまでの豊富な読書体験がその中に反映されていると指摘する。シンポジストは、エドモンド・スペンサーの詩が元になった箇所を指摘したり、彼の文章が後世の作家ヴァージニア・ウルフに影響を与え、彼女が*Mrs Dalloway*を執筆したときにその文章のスタイルを用いたと指摘する。

2. 日本アメリカ文学会第49回大会（於：立正大学）に参加した。初日の9日（土）は、アメリカの20世紀初頭のジャズエイジの代表的な作家フィッツジェラルドの作品*Tender is the Night*の研究発表を聴講した。その中で、発表者は作中での“psychiatrist精神科医”と“psychologist心理学者”の二つの語の使い分けに注目し、それを作家の自伝的なエッセイから読み解いた。そして、次に同じく20世紀の初頭のアメリカ文壇の寵児となったナボコフの自伝的な作品 *Speak, Memory* の研究発表を聴講した。近年、私は「伝記」という分野に関心を持っているので、伝記の一分野である「自伝」としてこの作品を読み解くという点に大きな興味を感じた。

翌日の10日（日）は、アメリカ文学界の重鎮の「若き日の夏目漱石をめぐる」という講演を聴講した。漱石は、明治の日本を代表する文人であると同時に、英米の文学を研究する学徒にとっては、第一人者として学ぶべきところが多い人物である。演者は、漱石が歩んだ英文学者への道をたどりながら、現在日本の大学の中での英米文学のおかれている現状を合わせて浮かび上がらせた。漱石が英語を学ぶことを通じて求めたのは、実作者としての道であった。もちろん、英文学者になることと、実作者になることは別なことであるが、それを、今の大学生の求めるものと大学が与えることのできているものとの齟齬に例えるような調子で語られていくと、私自身のおかれている場の将来の見通しの必要性を意識させる意味を読み取ることもできた。

3. 第12回日本アイリス・マードック学会年次大会に参加した。発表3件と講演1つというプログラムで実施された。一つ目は、初期の作品の*Under the Net*を偶発性をキーワードにして読み解いた。二つ目は、*The Book and the Brotherhood*をプラトンやヴェイユの哲学や思想をもとに読み解いた。三つ目は、日本の俳句とマードックの詩とを比較するものであった。

一方、講演は、「ジェイムズ・ジョイスと音楽」というタイトルで、マードックについてはなかったが、演者の宮田恭子氏が、研究生活をマードックの*The Bell*という初期の代表作の論文から始めたということの一つの関わりと考えての人選であった。内容は、ジョイスはその作品の多くに音楽の要素を取り込んでいるという前段の話から、代表作『ユリシーズ』の中に描きこまれる“音楽”的なものを指摘するものであった。

平成23年度：

1. 第50回日本アメリカ文学会に参加

ヘミングウェイのワークショップからは、これまで未公開であった手紙が近いうちに20巻本で出版されるというニュースと、今後のヘミングウェイ研究がこれらの大量の手紙をもとに行われることになるという情報を得た。一方、ジェイムズについてのシンポジアからは、ジェイムズが19世紀末から20世紀初頭のめまぐるしく移り変わる技術の進歩を巧みに作品に取り込んでいるという事実を知ることができた。また、自己の研究への新たな視座を得ることができた。

(学会報告、学会活動 つづき)

2. 第13回日本アイリス・マードック学会

3つの研究発表、1) 『『ユニコーン』における不思議な魅力を持つデニスについての考察』
2) 「The Dual Nature of the World in The Bell」 3) 「アイリス・マードックと宮沢賢治」と講演「マードックとベケット」を聴講した。

1)の発表は、私が司会を担当した。通常は作品『ユニコーン』の中ではわき役と考えられる人物デニス・ノーランに焦点を当てた発表である。また、その中では、ヒロインのハナをユニコーンに例えるという新しい視点からの発表であった。

2)の発表は、作品『鐘』の中に現れる事物が、実際のマードックの知っている事物と符合する例がいくつか見受けられるという視点からの発表であった。

3)については、マードック研究の第一人者で初代の会長が、インドのノーベル賞詩人タゴールを媒介として、マードックと賢治との類似性を指摘するものであった。マードックを知り尽くした研究者ならではの斬新な視点の発表であった。講演については、サミュエル・ベケットを斬新な視点から研究しているベテランの研究者が、マードックの作品の中でベケットの影響を指摘されている『網の中』を分析したものであった。しかしながら、ベケット研究者からみると、影響というほどの痕跡は見られないというものであった。また、自己の研究への新たな視座を得ることができた。

平成25年度：

5月、日本アメリカ文学会関西支部総会および懇親会(11日(土)、於：大阪大学豊中キャンパス)に参加した。予算案、行事予定そして事務局移転と会則変更の総会に続き、講演「ヘンリー・ジェームズと小さな少年 ルーズヴェルトとブードル、想像力と文体」に参加した。晩年ジェームズはアメリカを旅し、今までの彼の人生の歩みをアメリカの変貌に重ね合わせ、*The American Scene* や *A Small Boy and Others* などを書いた。今回のこの講演は、そうした時代のジェームズの姿をこの晩年の作品を手掛かりとして、描いたものである。

7月、TOEICの一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会が主催するセミナー(31日(水)、於：ベルサール半蔵門イベントホール)に参加した。海外から2名と日本から1名の講演者が、それぞれの実践例を紹介する形で、学生への英語教育の苦労が示された。特に、韓国からの講演者の話は、英語という言語の位置が日本の場合と似ているという点で大いに参考になった。本学は現在、英語科目を必修科目としている。講演者は、必修化をすることで必ず不適応学生を生みだすことを指摘し、そうした学生を如何に指導していくかが英語履修の成功のカギだと述べた。

8月、今年度から始めた、人間学研究所共同研究プロジェクト「多様化する学生と大学英語教育」の研究発表の場として、他3名のプロジェクトメンバーと共に、日本英語教育学会の第52回大会[年次国際大会](30日(金)~9月1日(日)、於：京都大学)にてポスター発表を行った。本プロジェクトは、本学が学生の自学教材として導入しているアルクネットアカデミー2を学生の英語教育に生かせないかという問いから出発したプロジェクトである。プロジェクトを通じて調査研究を進めていく中で、将来的には、授業の出席が困難な学生への、出席に代わる英語科目受講の手段となり得ないかの期待をかけている。プロジェクトメンバーが受け持つ必修英語クラスの中から、上位クラス、中位クラスそして、下位クラスをデータ抽出の対象として、とりあえず半年のみのデータを円グラフで提示し視覚に訴えることとした。合わせて、開学以来途絶えさせることなく実施してきた“オラルテスト”について、簡単なこれまでの経緯の説明と合格率のデータをポスターに記した。

10月、この月は毎年いくつかの学会に参加、あるいはそこで研究発表をしている。まず、5日(土)に、日本アメリカ文学会関西支部10月例会(於：関西学院大学上ヶ原キャンパス)で行われた小シンポジウム、[~ヘミングウェイ・アフタヌーン~ (タイトル「きれいはきたないきたないはきれい：“清潔”と“不潔”から読むヘミングウェイ」)]に参加した。ヘミングウェイ文学を「衛生」という観点から解読しようとする試みである。そして、12日(土)には、日本アメリカ文学会第52回全国大会(於：明治学院大学)に参加した。13日までの2日間の日程で実施されたが、翌日に公務があったため、土曜日の夜に帰途についた。2つの研究発表に参加したが、ジェームズの中期の小品*The Spoil of Poynton* の発表については、世紀をまたいで活躍した作家の面目躍如

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (6/6)

平成二十一～二十五 (2009～2013) 年度の主な研究成果等	<p>(学会報告、学会活動 つづき)</p> <p>といった20世紀的な特徴に光を当てた、大変示唆に富む発表であった。翌週19日(土)には、日本アイリス・マードック学会第15回大会に参加した。今回の大会で特に収穫であったのは、英国トマス・ハーディ協会副会長、日本オースティン協会会長の深澤俊先生の特別講演「戦後イギリス小説の虚構」である。演者は、マードックの <i>The Black Prince</i> 中の小さな記述の中に、他のイギリス小説とのつながりを見出し、それを聴衆に極めて明晰に語って聞かせた。</p> <p>12月、日本アメリカ文学会関西支部大会、臨時総会、および懇親会(7日(土) 於：龍谷大学大宮キャンパス)に参加した。合わせて「アメリカ文学を斜めから見る 翻訳という視角」というフォーラムが開催された。講師はいずれも、比較的新しいアメリカ文学の翻訳をその仕事の中心としている気鋭の若手研究者で、その話は翻訳の苦勞から始まり、外国語文学の研究には翻訳という存在は不可欠である、との興味深い指摘に終始した。</p>
	<p>(その他、エッセイ・翻訳・学術講演等)</p> <p>報告：</p> <p>1. 共同研究プロジェクト「多様化する学生と大学英語教育」、共著、平成26年3月、京都文教大学人間学研究所 人間学研究 Vol.14 (pp.105-106)</p>
	<p>(調査活動)</p> <p>平成 23 年 5 月・6 月 資料の閲覧・複写</p> <p>於：東京大学、立教大学</p> <p>1) Miriam Gross <i>The World of George Orwell</i>, 1977</p> <p>2) Peter Stansky & William Abrahams <i>Orwell: The Transformation</i>, 1994</p> <p>3) Peter Stansky & William Abrahams <i>The Unknow Orwell</i>, 1994</p> <p>4) Scott Lucas <i>The Betrayal of Dissent Beyond Orwell, Hichens and the New American</i>, 2004</p> <p>5) Christopher Hollis <i>A Study of George Orwell The Man and his Works</i>, 1956</p> <p>6) Leslie Stephen <i>Studies of A Biographer</i>, 1898</p> <p>7) A. J. A. Symons <i>The Quest for Corvo: An Experiment in Biography</i>, 1934</p> <p>8) Marc Pachter ed. <i>Telling lives, the biographer's art</i>, 1979</p> <p>9) Leon Edel <i>Bloomsbury: a house of lions</i>, 1979</p> <p>平成24年 5月 図書の閲覧</p> <p>於：東京大学大学院人文社会系研究科文学部図書室</p> <p>15日(火)は初日であるため、依頼しておいた7冊の中からまず読むべき書籍、および読むべき個所の特定に時間を費やした。そして、翌16日(水)はその事前の調査に基づいて、以下の3冊の内容の調査を行った。</p> <p>1) Ian McEwan/ Lynn Wells</p> <p>2) The Fiction of Ian McEwan/ edited by Peter Childs</p> <p>3) Ian McEwan/ edited by Sebastian Groes</p> <p>特に、3)の書籍については、pp.83-114の複写をした。</p>
	<p>(学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含)</p>
	<p>(学内活動)</p> <p>平成22年 4月 教務委員会委員「平26.3まで」</p> <p>人間学研究所所員「平26.3まで」</p> <p>研究成果刊行助成委員会委員「平24.3まで」</p> <p>平成25年 4月 むつみ会親睦会幹事「平26.3まで」</p>
平成二十一～二十五 (2009～2013) 年度における活動	<p>(小中高との連携授業の講師)</p> <p>平成24年10月 京都文教高等学校ALP「英語の発想で考えよう!」、於：同校</p>